

『終雪』

作者 淺羽 一

出掛けてみようかと考えたのは窓の外に雪が積もっていたからだ。本当に散歩でもしようとお靴を履いたのはお空の月があんまりにもまん丸だったからだ。つい先月に買ったばかりのコートをわざわざクロゼットから引つ張り出したのはどうやら風が強かったからだ。玄関を出る際に電気を消したのはもうその部屋に誰もいなくなったからだ。彼が女と出て行ったのはちょうど十日前だった。

ライナーにファーが付く膝上ぎりぎりの白いコートはいかにも都会的で大人っぽくて、普段はむしろカジュアルすぎる私にとつて正直ちよつと背伸びした買い物だった。底が厚めのブーツで踏む新雪は柔らかいと言うよりも軽い感じがして、そのくせさりさりではなくざくりざくりと鳴る音はいかにも現実的だった。

晩冬の夜風は覚悟していたほど強くなかったものの、多分、耳はすでに赤くなっていて、鼻の頭もきつとそろそろひりひりしてくる頃だった。マンション前にある公園の芝生広場は一面綺麗に雪色で、振り返れば等間隔に立ち並ぶ街灯が点々と足跡の陰影を浮き上がらせている。それがまるで真っ白い紙に刻まれたミシン目みたいだったから、私は大きくぐるりと円を描くように歩みを進めて点線の端と端を繋いだ。頭の中でぱりぱりと足下の雪が千切り取られて、やがてぽっかりと空いた穴からあの空の月がひよっこりと顔を出して歌い出す、そんな妄想に一人にやと笑いながら。

私を大人にしたのは彼だった。私を子供のままでいさせようとしたのも彼だった。お前はお前のままで良いよなんて決まり文句の愛情を信じながら、言われるがままに夜を覚えて、当たり前のごとく朝を迎えて、二人一緒に昼を過ごし、そんな一日を一粒ずつガラス瓶の中へ大切に貯めるように過ごしていた。

最初は軽く振るたびにからからと響いたガラスの瓶は、次第にざらざらと大きく鳴り、いつしか持ち上げることさえ難しくなるほど重くなり、気付けばそれを楽しみにすることもなくなっていた。最後の最後に抱えた瓶は、逆さに向けてもくすりとせせず、そのくせほんの少し力を抜いただけであっさりと落ちて砕けて散った。割れたガラスからざあと流れた思い出は、ビー玉ではなくむしろ金平糖みたいで、だけどおそらく舌に載せたらしょっぱそうだった。

街灯の下に立ち、両手をポケットに入れて眺めてみたら、やっぱり足跡は変に歪んで不細工な円を描いていた。これじゃああの月もきつと支えて出られそうにない。もう少し夜を数えれば形も細くなり抜けられるかも知れないけれど、その前にきつと足跡の方が溶けて流れて消えるだろう。かつて子供の頃に男子達がしていたのを思い出してふうーと出来る限り長く強く息を吐きだしてみれば、仄かに青い光の中で半透明の気体が伸びた。小さな影に重なった白は、ほんの一瞬だけであったものの雪の姿を元通りにした。私は不意に泣きそうになって、反射的に顔をこすって鼻を擦った。氷みたいな鼻の奥がつんとして、目尻にぴりりと痛みが走った。乾いた唇は大口を開けた途端に裂けそうで、リップも塗らずに外へ出てきた自分に女としての未熟さを感じた。今や彼の本命となった浮気相手はまさしく大人の女めいていて、バレンタインに賑わう街で堂々と腕を組んで歩く二人の姿は悔しいけれど自分達が鏡の前に立った時よりもお似合いで、それが余計に許せなかった。いつそ私みたいに大人へ憧れるだけの子供であったなら、それなら或いは私の方が大人を気取って許して上げてても良いわよなんて偉そうな態度で眺めてやれたかも知れない。いや、現実はやっぱり怒って泣いてどうしてとかつて騒いでいたな、うん、多分そうだ。だ

けど、その後で結局はお前だけだよなんて甘い言葉を囁かれて怒って泣きながらも許していたんだろう。あまりにも自分と違いすぎさえしなければ、まだ見ぬ己の未来へ重ねることも不可能なことではなかったはずだから。そしてまたそれまでの彼の言葉の一切を信じられなくなることもなかっただろうから。

外灯の照らす範囲から外れた雪景色は、月明かりだけを受けて水墨画のごとく広がっている。私はそれを眺めながら、寝る前に泣くのは今夜で最後にしようと思った。勢いよく啜った鼻汁が口の方へと流れてきて、ちり紙も持っていない私はしょっぱいそれを唾液ごと喉に押し込んでなかったことにした。

彼から貰った指輪に触れれば、左手のそれは体温を無視して冷たくて。私はぐりぐりと回しながら薬指の指輪を外すとそのままえいやと銀灰色の海へと投げた。直後に駆け出すかなと思っていた足は、だけど凍ったみたいに動かなくて、私は今さらながらにああ終わったなと悟った風に納得した。

指輪はもうどこへ落ちたのかさっぱり分からずに、少なくともこの雪が全て溶けてなくなるまでは見つけられないだろうと思った。そしてまた同時に、きっとその頃になれば雪と一緒に指輪も溶けてなくなっているだろうと思った。あれほどまでに見事な氷輪でさえ、おそらく明日になればもう微妙に形を崩してしまうのだから。それがやがて再び美しい円を描くまでには、もうコートのライナーを外して着られる季節がやって来る。

私は両手をポケットに入れて、来た道に背を向けるように歩き出した。

帰る先は決まっている。行く先に変わりはない。だけど進む道が異なれば、途中の景色だけでなく道中の気分も新しいものになるかも知れない。

終雪になるかも知れない新雪へ落とす足の速度をゆっくりにして、しんとした世界で耳を澄ます。今度こそさくりと雪が鳴る。

一歩一歩、雪を踏む。凍えるような寒さはコートがちゃんと防いでくれる。さくりさくりと足跡が増える。そうする内に鼻のひりひりがほっぺたにまで伝わって、帰ったらとりあえずお風呂に入って化粧水をたっぷり使うことに決めた。

〈了〉